

シニア合唱の未来

～歌の翼は広く、たくましく～

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団
横浜市磯子区民文化センター杉田劇場 館長
中村 牧

歌は身近な音楽であり、心に響く言葉であり、直接的に投げかけてくる。世界中に歌があり、日本中に歌があり、一人でも大勢でも歌えるのが歌である。身体をつかい、心を震わせることができる歌の魅力を一人ではなく、ともに作り、ともに体感し、ともに共感するのが合唱の魅力。

私自身の合唱体験や合唱団との様々な出会いに触れながら、7年前の横浜みなとみらいホール奉職時代に出会ったシニア合唱の素晴らしさ、アマチュアでかつシニア世代が奮起して作った「NPO 法人ゴールデンウエーブ」の躍進ぶりをご紹介します。

1. 合唱との出会い

私自身も、幼少期より賛美歌や聖歌隊が身近にあり、ピアノもやっていたが、歌うことが好きになり、小学2年生の時に、楽器店の音楽教室で小さな合唱団に入り、「ほたる来い」をみんなで歌ったのが最初の合唱の本番。

小学校高学年では音楽クラブで、「空はこんなに青いとは」を夢中で歌った。高校の時は、たまに、友達のご両親が主宰していた混声合唱団でお手伝い感覚で伴奏をしたり、アルトやソプラノを歌ったり、自由な感じで楽しんでた。ロジェ・ワーグナーの世界にも傾倒して、日本公演にも足を運んだ。

大学入ると全学年合同の合唱授業があり、女声合唱の美しさを学んだ。1年生から3年生までの音楽科生徒100人近くが、年に1回、横浜市民文化会館（現在の関内ホール）で定期演奏会を行い、メゾソプラノとして、私も四苦八苦しながら、3年生まで歌い続けた。その中で、今は亡き前田幸市郎先生の指導に深く感銘を受けた。

大学1年生の夏、1年生から3年生までの学生が清里の大学寮で寝起きし、合唱合宿。朝6時半からの合唱練習。八ヶ岳を見ながら、先輩の体操、発声、ラテン語の読み方から始まり、先生の合唱指導が宗教曲から始まる。ユーモアたっぷりの指導で、学生を笑わせながらも、本質を突く。「ビラビラした声はいらない、大きな声もいらない、その音だけを出しなさい。ピブラートの無いまっすぐな音を3つ合わせて、澄んだポリフォニーができるんだよ」と、教えていただいた。深遠な合唱の空気を感じ、精緻な音づくり、重なった音に倍音が生まれる瞬間をはじめて体験したことは今でも忘れることができない。「萩原君の作品にも、ビラビラはダメだよ」「ソリストじゃないんだよ、声楽とは違うんだよ」と言って指導を受けた時に、萩原英彦先生の手書きの楽譜からフレーズが抜け出して、大学寮の練習室から見える八ヶ岳の夕日に向けて、一陣の風が吹いたような不思議な感覚を今でも覚えている。

社会人になり、仕事の合間にみんなと一緒に歌いたいと思い、地元の女声合唱団に入ったり、混声合唱団の臨時伴奏をしたり、仲間作り、交流の場である合唱の体験もしたことも、合唱の魅力の一つだと考えている。

2. ゴールデンウエーブをつくった人たち ~吉田奈美子と仲間たち~

合唱の魅力は、ともに歌い、ともに高揚し、ともに創る無限の喜び。生涯に渡り、楽しむことのできるコンテンツ。ともに歌うことで、心の内にあるエネルギーを外に大きく出して元気になり、練習に通うために体力作りをしているシニア合唱団のメンバーが年々増えている。日本中の元気なシニア合唱団、シニアメンバーを支えているのが、ゴールデンウエーブを立ち上げた吉田奈美子さん（95歳）と仲間たち。

吉田奈美子さんは福島出身で、^{あさか}安積高等女学校（現在：安積黎明高等学校）時代、合唱部でローレライやシューベルトなどを多く歌っていたという。83年以上前から合唱一筋。横浜で長くアマチュア合唱団を運営し、自らも歌い、神奈川県合唱連盟などで役員を歴任。横浜の合唱団の仲間たちとともに、横浜開港150周年という節目に立ち上げた『ゴールデンウエーブ in 横浜』。

合唱団仲間たちが年齢を重ねたことで培われた経験や人脈を生かして、横浜にとどまらず、沖縄から北海道までのシニア合唱団に立ち上げの案内を送り、参加の呼び掛け。世界の合唱団も招待し、2008年4月に横浜開港150周年記念行事の一環として、横浜から世界に発信する<国際シニア合唱祭『ゴールデンウエーブ in 横浜』>を開催し、参加団体が83団体を集めた。当時は、10年以上前なので、80代の吉田さんと60代、70代の仲間たち。



NPO 法人ゴールデンウエーブ
理事長 吉田奈美子さん(95歳)

3. 任意団体ゴールデンウエーブからNPO法人ゴールデンウエーブへ

2012年に、横浜みなとみらいホールに勤務していた私が出会ったのが吉田奈美子さん、当時88歳。「ゴールデンウエーブ」実行委員会のみなさんとともに、高齢である自分たちが、この先どうこの合唱祭を無事に開催し続けることができるかをご相談に見えた。シニア合唱団の発表の機会を作ろうとはじめた合唱祭の実行委員会は、行政主導でも専門家主導でもなく、生粋のアマチュア集団。自分たちが長きにわたり合唱活動をしてきたという誇りが後盾。日本全国のシニア合唱団に呼びかけ、ともに歌うことの喜びを同じステージで、分かち合うことだけを真剣に取り組んできたが、あまり経営感覚がなく、自転車操業、合唱団や一部個人の持ち出し、立て替えで何とか4年間持ちこたえてきたという。そこで、任意団体『ゴールデンウエーブ』から、NPO法人として組織化し、経済的に基盤を作り、団体の自立を目指したらどうかと提案した。法人として認められる要因として
横浜に合唱を通じて、全国、世界から人が集まってくるということは、「文化創造都市横浜」の街の賑わいに貢



本部関係のボランティアスタッフ
吉田理事長を囲んで

献していること。 全国から出演者が団体ツアーでやってくることで、みなとみらい・中華街・横浜の商業施設・宿泊施設なども潤い、経済効果があること。 高齢化社会が進む中で、健康で元気な高齢者が増えること

は健康寿命を延ばしていくことになること。生涯を通して、音楽の力を信じ、仲間とともに歌い続けていることで、心豊かで生きていることに喜びを持ち続けられる生活を営めること。などの成果を出しているのだからと。



慶雲合唱団（韓国）に国際交流賞を授与している様子

理事長には当時、90歳近い吉田奈美子さんを看板として立たせることで、誰もがエールを送ることになる。いかなる時も果敢に取り組む姿勢を内に秘めながら大らかなキャラクターで、「専業主婦だった私が、ここまで合唱に支えられてやってきた。どうぞよろしくお願いいたします」と手順を踏んで、先頭に立てば、行政としても、「人生100年時代」の見本になる事例、横浜市や神奈川県が応援しな

いはずはないと、あたかも、国会に出馬を依頼するような思いで、援護射撃を送った。

そして、本当に、ゴールデンウエーブ実行委員会は、2015年11月「NPO法人ゴールデンウエーブ」として、法人登記をした。

ゴールデンウエーブの初代名誉理事は日野原重明氏であり（現在：永久名誉理事）、「シニアの歌声には、人生経験がにじみ出ている、若い人にはない味がある。音楽を通して互いに刺激し合い、共感できる幸せがゴールデンウエーブの合唱祭にはあふれている」と新聞のコラムに書いてくださったそうだが、シニアの力、音楽の力は、温かくかつ壮大であり、尊いものだと感じた。

法人化後、さらに歌の翼は広がり続ける。日本全国の歌の仲間たち、シニア合唱団たちを束ねる。理事長やメンバーの長年の人脈で、それぞれの都道府県の合唱祭や合唱連盟の顔としている仲間たちやその紹介者などに、<シニア合唱祭 ゴールデンウエーブ in 横浜>開催時に、地域アドバイザーとして、参加してもらい、沖縄から東北までゆくゆくは都道府県すべても網羅する全国ネット作りをしている。地元の大学と連携し、合唱祭当日の運営のサポートをお願いできたりするのも、OBの宝庫、シニア合唱の力。横浜近郊の参加団体は、当日はスタッフとしても参加。横浜みなとみらいホールのパイプオルガンを活用する場面をつくり、90歳を超える参加者には、毎年「賞」が送られ、それを楽しみに全国から参加する超シニア世代も。

協賛企業を募ろうと、伝手を辿って、日々、動く



参加団体の受付の様子。追加参加費の支払い、忘れ物の管理、ブロック終了後講評カードを渡す等業務は多彩

シニアパワー。表彰式の副賞を近隣企業から集めたり、近隣のホテルとタイアップしたり。ゴールデンウエーブのみなさんと接する近隣企業の方々も、シニア合唱祭の面々に、勇気や、やる気をもたらしているという。

このような好循環をもたらす、シニア合唱祭。人生のお手本として関わりたいと思う人も増えているに違いない。

今年はどんな企画を合唱祭の中に組み込もうかと、メンバーたちは5年先、10年先を見据えているのだろう。歌の翼とともに、団体の翼も広げ、たくましく、元気なシニアの合唱の未来は明るい。

人生の先輩たちに、私にも何かできることはないかと、おこがましくも、いつも、お声をかけている。

彼らのように、生涯をかけて音楽とともに生きるために・・・。



ゴールデンウェーブ合唱団（指揮：岸信介 ピアノ：野間春美）

2018年より、グループとしては出演しないが舞台に立ちたいという希望をかなえようと、公募の合唱団も結成。公募で集まった181名が7回の練習でステージに立った

国際シニア合唱祭『ゴールデンウエーブ in 横浜』のあゆみ

第1回	2008年4月	83団体	3045人	
第2回	2009年4月	90団体	3042人	中国1団体・台湾2団体・韓国3団体
第3回	2010年4月	74団体	2783人	
第4回	2012年3月	80団体	2685人	
第5回	2013年4月	73団体	2323人	台湾1団体
第6回	2014年4月	89団体	2965人	台湾2団体・フランス1団体
第7回	2015年4月	95団体	3224人	台湾2団体
第8回	2016年4月	87団体	3354人	台湾1団体
第9回	2017年4月	97団体	3658人	台湾1団体
第10回	2018年4月	113団体	3670人	台湾2団体・韓国1団体
第11回	2019年5月	106団体	3800人	台湾1団体・韓国4団体

《ゴールデンエイジ！》

この言葉には人生の豊かさ、優しさを育む響きをもっています。

大航海を無事乗り越えてきた悠々とした風格をも感じさせます

そんなゴールデンエイジの仲間たちの輪を合唱という大きな響きにして横浜から世界へ発信しようと、2009年4月、横浜開港150年記念事業の一環として《国際シニア合唱祭『ゴールデンウェーブ in 横浜』》が企画、開催されました

世界でも類を見ないこの国の急速な高齢化の渦中であって様々な形で社会に貢献してきた高齢者たちが健康で生き甲斐に包まれた“生涯現役”の生活を送られる為の一助として国際社会・横浜に相応しい合唱祭にしたいと企画いたしました

音楽を志す者すべてが憧れ、夢見る「横浜みなとみらいホール」に国内外のシニア合唱団が集い、歌い、語り合い、響き合いその友情の輪は生きる力となって永久に語られ、歌い継がれていくことでしょう

ゴールデンウェーブ ホームページから抜粋



女声合唱団「シャイニー」（沖縄県浦添市）の演奏風景。衣装がきれいです。

普段は指導を受けることが難しい一流の作曲家や指揮者、声楽家が講評者として顔をそろえる。1グループにつき複数の講評者が批評することも、人気の秘訣。

写真提供: スタッフ・テス株式会社